# 活動ピックアップ！

## 長岡地域 Nagaoka

### 学生と留学生で作る、異文化交流イベント

ベトナムフェス実行委員会

日本とベトナムの互いの文化を理解し、交流するイベントを企画中。メンバーは長岡技術科学大学・長岡造形大学・長岡高専の学生で構成されており、半数はベトナム人です。留学生と学外の住民との交流が少ないことや、気軽にベトナム料理を食べる場所がないなどの悩みを聞いたメンバーの発案により、この事業が始まりました。学生中心の団体なので資金集めに苦労していますが、賛同者を得るために企業や団体への声がけを頑張っています。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

3 すべての人に健康と福祉を

### 社員の健康が地域の活性化に

日本精機株式会社

自動車やバイクに搭載されているメーターの開発・設計・製造を行う会社です。社員の健康に配慮した社員食堂メニュー「ウェルネスランチ」や「SDGs・健康経営メニュー」開発に取り組んでおり、地域の団体や学校、企業との交流を通して、社員だけでなく地域の皆さんにも元気になってほしいという想いをもって活動しています。社員食堂のメニューが家族団らんの話題となり、楽しく食を考えるきっかけになってほしいです。

## 市民活動 虎の巻

研究テーマ

### アイデアの出る会議にするには？

より詳しく知りたい方はこちら！

会議や打ち合わせで、「なかなか意見やアイデアが出ない」、「同じ人ばかりが発言している」といったことはよくあります。今回は、色々な人からアイデアを出してもらいやすくするための、ちょっとした工夫をご紹介します。

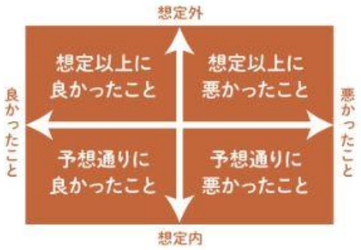
#### 「発言してもいい場」ではなく「する場」に

会議でなかなか発言できない理由の一つは、「私なんかが発言して良いのか…」という遠慮。よく日本人は自己主張や、活発なディスカッションは苦手と言われますが、「何でも発言して良いよ」と言われるとかえって萎縮してしまいがちです。一方で、指名して聞くと、大抵はちゃんと意見を持っていたりします。なので、意見がほしいときは、司会が順番に指名するなど、必ず発言する機会をつくれば実は意見はけっこう集まります。

#### アイデアの「的」を用意する

発言の機会があっても、「的外れだったらどうしよう…」という不安から、当たり障りのない意見しか出ないということもよくあります。そんな時は「何が求められているのか？」や、「どんな基準で考えれば良いのか？」がわかる、アイデアの"的"があると発言しやすくなります。そのためには、司会が積極的に質問を投げかけたり、またアイデア発想のフレームワークを使ったりすると効果的です。

例えば、イベントや事業の反省会をする際に、「2軸思考」を使ってみましょう。図のように、縦軸に「想定内↔外」、横軸に「良い↔悪い」を設定すると、想定通りに①良かった／②悪かった、③想定外に悪かった／④想定以上に良かった、という4つの視点（マト）ができます。ただ普通に反省点を聞かれるよりも、意見が言いやすい気がしませんか？




## センターからのお知らせ

専門家から話を聞けるチャンス

### インボイス講座

毎月開催中！市民活動の基礎知識を学べる講座「学びの場」。11月は「いよいよ始まったインボイス制度を知ろう」と題し、専門家の方から制度の仕組みや留意すべきポイントをお話しいただきます。ぜひご参加ください。

**日　時**　11月22日（水）13:00～14:00

**参加方法**　現地（ながおか市民協働センター 第1協働ルーム）／ライブ視聴

**申込方法**　11月20日（月）までに、QRからお申込みください。

▲お申込はこちら


発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel . 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakyodo.net

知る、つながる 好きになる らこって
つながる ラジオ
市民活動のポータルサイト コライト

配布場所　長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。


# らこって Racotte

知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌


2023
11
vol. 131


## 「比礼カカシプロジェクト」に見る活動継続のコツ

ながおか市民協働センター

特集
長岡造形大学
境野 広志さん
栃尾比礼地区
橘 仁さん
長岡造形大学
阿部 愛さん

NAGAOKA PLAYERS
那須 一美さん

活動ピックアップ
ベトナムフェス実行委員会

長岡みんなのSDGs
日本精機株式会社

# 「比礼カカシプロジェクト」に見る活動継続のコツ

学生が作成したカカシの中から、地域の人がどれがいいか投票するカカシコンクールの後の一枚。

「よし、やるぞ！」と意気込んで始めたものの、先が続かない。市民活動でも、私生活でも、身に覚えのある方も多いのではないでしょうか。徐々に新鮮さが失われていく中で、当初のやる気を維持しながら決めたことを続けていくのは難しいものです。市民活動で言えば、2020年の新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけに活動が途絶え、再開させるタイミングを失っている団体もあるのではないでしょうか。今月号では、感染症流行の時期を乗り越え、今もなお続いている「比礼カカシプロジェクト」に関わる、長岡造形大学教授・境野広志さん、栃尾比礼地区区長・橘 仁さん、長岡造形大学学生・阿部愛（まな）さんにお話を伺いました。

## 「比礼カカシプロジェクト」とは

「比礼カカシプロジェクト」とは、長岡造形大学の学生たちが作ったカカシを栃尾比礼地区にある棚田に設置する過程の中で、農作業や食事会を通じて学生と地域の方が交流するプロジェクトのこと。2009年に、プロジェクトの前担当者である長岡造形大学教授・上野裕治さんの「田んぼの景観をよくしたい」という想いのもと、ゼミナールの活動の一環として始まりました。その後、地域の方が投票するカカシコンクールや7月の農作業など、学生と地域の方が交流する機会を増やしていき、現在は、ゼミナールの活動の一環としてではなく、地域社会や地場産業と学生・教員が協働して地域の新たな価値を創造する「地域協創」の授業のひとつとして開催されています。「地域協創の授業を取るなら、カカシプロジェクトがいいよ」と先輩から後輩へ受け継がれているほど、人気があるそうです。

## 感染症の流行による継続の危機

2009年から始まり、棚田に関する優れた取り組みを認定する、農林水産省の「つなぐ棚田遺産」にも選ばれていますが、感染症の流行により継続が危ぶまれた時期がありました。それまで大切にしてきた交流ができない状況になり、2020年には、学生が作ったカカシの写真を地域の方に送って審査する「バーチャルカカシ」を実施。2021年には、カカシの設置はできたものの、感染予防のため設置期間は2週間となりました。

## 危機を乗り越え、継続できたワケ

### win-winの関係を築く

「比礼カカシプロジェクト」は、新型コロナウイルスの影響による継続の危機を乗り越え、2023年の今も続いています。最近では、放棄田の景観維持のため、そばの実栽培とそば打ちもプログラムに加わったのだとか。ここまで続いてきた理由を境野さんはこう話します。「『必修の授業だから』というのはもちろんありますが、学生たちの『やりたい』という気持ちの後押しもあるのではないでしょうか」。実際に、プロジェクトは授業のひとつにはなっているものの、単位取得に関係なく参加する学生が毎年2〜3人いるそう。自身もプロジェクトに参加してから3年目になる阿部さんによると、「大学では学べないことが学べること、そして地域の人との交流がとても楽しい」そうです。また学生を受け入れてきた橘さんは、学生の存在が地域に住む人たちの力になっていると話します。「私たちだけだと『地域には何もない』と思いがち。しかし、こうして学生さんが一緒に活動してくれることで地域の価値を再確認し、自信が生まれるのです」。

学生と地域の人たちによる食事会。

## 大切なのは「相利」

「協力のテクノロジー 協力者の相利をはかるマネジメント」著者の松原明氏によると、相利（関係者それぞれに利益のある状態）を実現すれば、それぞれにやりたいことが違っていたとしても協力してプロジェクトを行うことができるそう。「比礼カカシプロジェクト」は、まさにこの相利を上手に実現しているプロジェクトと言えるのではないでしょうか。「授業をしたい」大学側と「多様な学びをしたい」学生、そして「地域に人が来てほしい」住民の方たち。目的は違えど、同じプロジェクトを通してそれぞれの目的を達成しています。プロジェクトの立ち上げの際には、それぞれの相利を考えながら協力者を集めることが大切なのかもしれませんね。

何かを始めるために協力者を集めるとき、あなたの想いに共感してくれるかだけではなく、互いにメリットがある関係性になれるかどうかを考慮することも大切です。月日が経ち、活動開始当初と比べ活動に対するやる気が下がるときが来ても、そのメリットが続ける理由となり、やる気が回復するまでの間を取り持ってくれるのではないでしょうか。

## お話を聞いた人

**境野 広志さん**

長岡造形大学 プロダクトデザイン学科長・デザイン学科教授。地元に住みつつ、「比礼カカシプロジェクト」に関わる。

**橘 仁さん**

栃尾比礼地区区長。2016年、区長になったことを機に「比礼カカシプロジェクト」に関わる。

**阿部 愛さん**

長岡造形大学４年生。2年生の頃から「比礼カカシプロジェクト」に参加し、単位を取得した後も参加し続けている。

# NAGAOKA PLAYERS

ウワサのあの人にインタビュー！

**那須 一美 さん（58歳）**

Country Festival実行委員会代表/
bakery & cafe Favoriteオーナー

1965年生まれ。死ぬまでにもう一度お店をやりたいと2022年にカフェ併設のパン屋Favoriteをオープン。

## やってみたいの“ノリ”で地域の日常を盛り上げる

栃尾生まれ、栃尾育ち。生粋の栃尾人である那須一美さんが実行委員長を務めているのは、Country Festival実行委員会（以下：カンフェス）。「アメリカの片田舎のお祭り」をコンセプトに、道の駅R290とちおに隣接している芝生広場で開催。多い時には約5,000人の来場者が来るほど、地域内外からも人気のあるイベントです。

元々カンフェスを立ち上げたきっかけは、友人と訪れた「八ヶ岳カンティフェア」に衝撃を受け、栃尾でもこんなイベントがやってみたいという想いからでした。当時からよく遊んでいた仲間たちの協力があり、2004年、2005年と2回開催。その後は子育てに専念していたこともあり、3回目を開催できないままでしたが、再開を願う周囲の後押しもあり2012年から再スタート。その後はウイルス禍を除き、毎年開催。2023年には12回目を迎えました。「最初も再開のスタートも、やってみようという周囲との“ノリ”で進められました」。

しかし、これほど人気のイベントを運営していても「地域活性化にはならない」と感じているそう。「年に1回のイベントでは一時的な盛り上がりをつくることはできても、日常的な地域の盛り上がりをつくることは難しい。栃尾で多くの人がイベントやお店などの事業を始めて継続していくことで、地域の日常が盛り上がるのではないかと思います」。それでもカンフェスを継続しているのは、「自分も何かしようと一歩踏み出す人が増えてほしい」から。そのきっかけづくりの役割を担いたいと話します。その想いが周りに伝わり、活動に協力してくれる必要不可欠な仲間たちが集まってくれているのかもしれません。

2022年の1月には、自身のお店を栃尾にオープン。自身のお店も栃尾で日常的な盛り上がりをつくる一つであり、公私ともに栃尾に活気をもたらしています。代表として運営をしながらも、見すえている先はこれからの栃尾のこと。これまで多くのイベントに関わってきた那須さんは、今後もこれから何かを始める人の伴走をしていきたい、とのこと。栃尾でなにかやってみたい！という方は、ぜひ那須さん会いにいってみてはいかがでしょうか。

フェス限定メニューの「ワイルドバーガー」は、栃尾の飲食店オーナーたちと試行錯誤の末完成した商品。運営費を確保する取り組みの一つです。

カンフェスのこだわりは「異空間を作ること」。会場にはアメリカンを感じさせるウッディなアーチやインディアンのモニュメントを設置し、工夫して雰囲気をつくっています。

活動の根っこ

みんなが輝ける場所を!!

那須一美